

離島に吹くあたらしい風



平岡昭利編、海青社、2009年9月10日発行、1667円十税、A5判、111頁

高度経済成長期において、半島や離島では観光ブームが発生し、団体ツアー客や若者のバックパッカーなどが多数訪れた。しかし、安定経済成長期以降、半島や離島は、いわゆる観光地（一生に一度行けば良いという意味での観光地）化し、観光客数は40%減とか言われ、当時、流行した多くの民宿が経営者の高齢化などもあって、廃業をする憂き目にあうことになった。

ところが、近年、スローライフ、スローフード、スローツーリズムなどのように、「スロー」を意識する生活が見直されてきた。これは高度経済成長期における経済や生活の急激な変化に

対するもので、大量生産・大量消費に対するアンチテーゼを示すものである。スローフードとは「地産地消」、さらに進んで「自産自消」の生活となる。観光事業では、田舎、つまり半島や離島において、スローツーリズムにおける地域の活性化、地域づくりが芽生えつつあり、こうした中で、本書が出版された意義は大きいと思われる。

本書の特色は、図・表・写真が多いこと、文章が平易で、読みやすいことなどである。特に、図は地図が主体で、地図を通して地域事象が把握できるので、地理屋（地理学専攻生）らしい地域表現となっている。

本書の構成は、次の通りである。Ⅰ. インバウンド観光に揺れる「国境の島」－対馬（長崎県）、Ⅱ. キリシタン・ツーリズムが展開する島々－五島列島（長崎県）、Ⅲ. グリーンツーリズムの導入を模索する島－粟島（新潟県）、Ⅳ. ブルー・ツーリズムの定着を図る島々－壱岐島・青島（長崎県）、Ⅴ. エコツーリズムの展開と住民評価－西表島（沖縄県）、Ⅵ. エミュー牧場を経営する漁業の島－蓋井島（山口県）、Ⅶ. Iターン者が急増する南国の島－石垣島（沖縄県）。

以下、各章について簡単に触れてみよう。「対馬」韓国との国境の島として知られ、マスコミを通して面白おかしく情報が発信される島として知られる。ここでは、日韓交流と増加する韓国観

光客の増加の様子を報告。特に受け入れ体制と温度差に関する報告は興味深い。急激な韓国観光客の増加で、地元民の戸惑うさまが読み取れる。「五島列島」キリシタンの島として知られ、教会などを活用した観光の実態を報告。世界遺産登録の良否についても触れている。「粟島」島の主産業は時代と共に、農業から水産業、そしてサービス業へと変化し、現在はグリーンツーリズムに取り組んでいることを報告。「壱岐島・青島」漁村滞在型観光のブルーツーリズムの視点で、漁村体験型観光の実態を報告。「西表島」エコツーリズムの視点で、自然体験型観光の実態を報告。「蓋井島」大型の島・エミュー牧場を開き、エミューを核とした地域おこしの実態について報告。「石垣島」増加するIターンの実態について、具体的な事例をもとに報告。

離島は高齢化が進み、流出可能な人口は出尽くし、生活環境は一層厳しくなっている。まさに負の嵐が吹き荒れている。こうした離島情勢だが、一部の離島において、新しい風が吹き始め、地域の活性化や地域づくりに取り組む島が出現してきた。今後の離島は、観光客や交流客が年に4回は訪問する「リゾート」型の離島を目指すべきであり、本書はその好例を紹介している。離島に限らず、過疎地や半島などの関係者にもお薦めの一冊と言えよう。

（浦 達雄 大阪観光大学）